

第7回米百俵賞受賞

(平成15年6月15日表彰)

高橋 一馬 (千葉県市川市)



アフリカ・サヘル地域の砂漠化防止と住民の食糧自給を目指し、苗木づくり、野菜栽培、薪の消費量を抑える改良カマド作りの技術の普及などに貢献した。

■受賞時プロフィール

旧新潟県中魚沼郡川西町出身の高橋氏は、ある日、インドでたくさんの餓死者が出たという小さな新聞記事に衝撃を受ける。雪国で育った氏には、暖かい南の国に食料がないということが理解できなかった。昭和38年ころ、30年先には人口が増加し食料が足りなくなるかもしれないという予測が国連から発表されていた。氏のなかでその二つのことがオーバーラップし、瞬間的に「農業こそ自分が生きる道だ。農業で世界を救いたい」と思い立つ。いい百姓になるには、勉強が必要だと思った氏は、高校に入り直し、大学で農学を専攻する。大学

時代バングラデシュでボランティア活動に従事するなどいろいろな活動を行うが、自分自身はどうせやるならだれもやっていない場所で農業生産をしたいと思うようになる。

いろいろ考えた結果、まだだれもやっていないと思う最も過酷な条件をもつアフリカこそ自分の目指す場所であり、「いまは砂漠化で農地すらないけれども、そこに緑を育て森をつくり、最終的には農業生産を行いたい」と考える。その夢の実現のため、大学を卒業後、フランスの農家で有機栽培農業の研修を受ける。31歳のとき、アフリカに渡り、日系企業で働きながら、将来活動するため

の調査研究を重ねる。森林不足と地力の低下から砂漠化し、食糧不足に苦しむアフリカの惨状を目の当たりにし、「飢餓をなくすためにはまず環境回復を」と決意を固める。

氏は、アフリカ・サヘル地域の砂漠化防止と住民の食料自給を目指し、平成3年「緑のサヘル」を設立、チャド共和国で活動を開始した。アフリカ・サヘル地域は「飢餓ベルト」と呼ばれ、慢性的食糧不足に陥っている地域。氏は「緑を育てることは人づくりである」と農民とともに汗を流し、信頼関係を築いた。「緑を殖やす・緑を減らさない・食糧自給の達成と生活改善」を活動の柱とし、苗木づくり、野菜栽培、薪の消費量を抑える改良カマド作りの技術などの普及に努めた。10年間で30万本以上の苗木を生産植林し、乾燥した環境に適した外来種の導入も新たに試みている。

氏は、15回以上もマラリアに冒されながら、「アフリカに生涯を捧げる」と語り、アフリカと日本を往来し、活動を続けている。

■受賞後の活動

平成16年、高橋氏は健康上の理由から「緑のサヘル」の代表を辞任した。しかし、その志は引き継がれ、令和3年現在、「緑のサヘル」はチャド、ブルキナファソ、タンザニア連合共和国で活動を続けている。

「緑のサヘル」は、現地の人々と共に取り組む現場密着型の活動が高く評価され、平成13年には外務大臣表彰を受賞。また平成16年から18年にかけて、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）のパートナーとしてチャドにおけるスーダン難民支援活動に携わったほか、平成21年からはJICA（国際協力機構）とパートナーを組み、ブルキナファソのバム県において土壌保全事業や植生回復事業を展開している。